

日本の中高年・高齢者の精神病理における心的外傷体験と社会環境の変遷の影響：4490名の精神科入院患者の後ろ向き観察研究

東京大学医学部附属病院 精神神経科
病院診療医・大学院生（-2025年3月 届出研究員） 高橋 優輔

（共同研究者）

東京大学医学部附属病院 精神神経科	届出研究員	山岸 美香
東京大学医学部附属病院 精神神経科・		
東京大学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構		
	学術専門職員	中越 清子
東京大学医学のダイバーシティ教育研究センター	准教授	里村 嘉弘
東京大学医学部附属病院 精神神経科	大学院生	頓所 詩文
東京大学医学部附属病院 精神神経科	大学院生	澤井 大和
東京大学医学部附属病院 精神神経科	助教	金原 明子
東京大学医学部附属病院 リハビリテーション部	助教	森田 健太郎
東京大学大学院医学系研究科 疾患生命工学センター	構造生理学	
	講師	柳下 祥
東京大学医学部附属病院 精神神経科・		
東京大学医学のダイバーシティ教育研究センター・		
東京大学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構		
	教授	笠井 清登

はじめに

中高年・高齢者における精神症状は多様で、加齢による脳器質的変化のみならず、その生涯で経験した心的外傷体験や、その人が生きてきた時代の戦争体験、経済成長、家族構造の変化などの社会環境に深く影響されることが想定される。例えば接触欠損パラノイドと診断されるような老年期の妄想性障害や老年期うつ病に見られる妄想主題は、精神病理学の領域で、本人が幼少期に体験した家庭や社会の環境を反映する可能性が指摘されてきた。しかし、日本特有の社会的文脈が精神病理に与える影響を大規模データで検討した研究は少なかった。

本研究は、東京大学医学部附属病院精神神経科の入院患者データベース（2008年～2020年、4,490名）を用いて、小児期逆境体験（ACEs）や社会環境要因がどのように時代によって変容し、精神疾患の臨床像や社会機能に与えるのか、多角的に解明することを目的とした。

結果

本助成による研究期間中、主に以下の3点についてデータベース解析を進めた。

1. ACEs体験率の時代的変遷とジェンダー差

戦後の急速な社会変化や家族構造の変化が、各世代でのACEsの体験をどのように変容させたかを調べるため、本研究では、ACEsの体験率や種類が出生年代によってどう異なるかを検討した。2008年～2020年の入院患者4,490名のうち、ACEs抽出を終えた2,000名(平均年齢 男性41.6歳、女性45.3歳)を対象とした。当科で開発した後ろ向きカルテ研究用のACE尺度(RC-ACEE尺度⁽¹⁾)を用い、診療録情報から後方視的にACEsを評価した。対象者を出生年代別に10年ごとに区分し、ACEsの種類別該当率を比較した。

結果として、(1)全体のACEs該当率(1つ以上)は39.9%(793名)であった。ACEs該当率は女性(42%)が男性(37%)より有意に高く(p=0.036)、入院時機能スケールは男性が有意に高かった。(2)出生年代別では、1920～1940年代生まれの群では、ACEsの該当は稀であり、認められる場合も、家庭内や世代間に由来する垂直要因が中心であった。(3)一方、1950年代以降の出生群では、同世代間の関わりに由来するいじめや心理的ストレスが増加し、特に1980年代以降の出生群ではその該当率が30%を超えていた。これらから、ACEsの中心が家庭環境から社会・同世代環境へと移行していることが示唆された。本研究は、学術変革領域『当事者化人間行動科学』領域会議(2025年9月23日)で発表された(山岸ら)。



図1 小児期の世代間・同世代トラウマ体験率の時代による変化と背景情報(山岸ら)

2. 小児期逆境体験の質的差異が精神症状に与える影響

小児期逆境体験が世代によって大きく質が異なることが明らかとなった。ACEsが精神疾患と関連することは古くから指摘されるが^(2, 3)、その違いが症状や社会機能に与える影響は明らかでなかった。ここでは養育者からの虐待・ネグレクト等を垂直ACEs、いじめや仲間からの拒絶等を水平ACEsと定義し、この二者が精神症状や社会機能に与える影響の相違を検証した。

当科の検査入院プログラム参加者593名(平均年齢38.5歳、女性48.8%)を対象とした。診療録から当研究グループ開発の評価尺度(RC-ACEE)を用い、ACEsの有無を評価し、「なし群」「垂直のみ群」「水平のみ群」「両方群」の4群に分類した。抑うつ症状(HAM-D)、機能(GAF)、QOLを比較し、さらに垂直×水平ACEsの交互作用効果を線形回帰分析で検討した。

結果として、(1)ACEs経験群(いずれかあり)は、なし群と比較し、QOLが有意に低かった($p=0.013$)。 (2)全患者($N=593$)の症状別比較では、身体的不安において群間差が認められ($p=0.05$)、事後検定では特に「両方群」が「垂直のみ群」「水平のみ群」より有意に高かった。これは、異なる質のトラウマの重複が身体症状と強く関連することを示唆する。(3)うつ病患者群($N=287$)に限定した解析では、精神運動抑制において4群間に有意差が認められ($p=0.006$ 、FDR補正後 $p=0.03$)、事後検定で「垂直のみ群」が「なし群」と比較して有意に高いことが示された($p=0.003$)。垂直ACEsが、うつ病の中核症状の一つである精神運動抑制に特異的に関連する可能性が示唆された。

本研究並びに関連する結果は、第121回日本精神神経学会学術総会(2025年6月19日)および第19回日本統合失調症学会(2025年4月26日)で発表された。前者は日本精神神経学会学術総会 優秀発表賞ならびに精神神経学雑誌投稿奨励賞(学術総会部門)を受賞し、精神神経学雑誌に掲載予定である。

3. 精神疾患間における教育年数(Educational Attainment:EA)の差異と機能との関連

背景・目的：教育年数(EA)は、生涯を通じた健康を左右する重要な社会決定因子である。特に統合失調症(F2)は好発年齢が学業期と重なるため、EAへの影響が懸念されるが、他疾患との比較や機能との関連についての本邦での知見は限られていた。

データベースから22歳以上の成人患者を抽出し、ICD-10診断に基づき、F2群(統合失調症圏、 $n=454$)、F3群(気分障害圏、 $n=848$)、F4群(神経症圏、 $n=233$)に分類した。まず、F2群とF3+F4群の間でEAを比較するため、年齢、性別、ACEsの有無を共変量として調整した線形重回帰分析を行った。次に、F2群内において、EAがGAF(全般的機能)に与える影響を、年齢・性別を調整した線形回帰モデルで検証した。

結果として、(1)年齢、性別、ACEsの有無を調整した後でも、F2群のEAはF3+F4群(基準)と比較して有意に短かった(係数 $=-0.583$, $p<0.001$)。 (2)F2群内において、EAが1年長くなるごとに、GAFスコアが0.616点上昇するという有意な正の関連が認められた($p=0.025$)。 (3)F3+F4群では年齢が高いほどEAが短いという一般的な世代効果が見られたのに対し、F2群ではその関連が弱い傾向があり、発症による学業中断という疾患特有の影響が、世代効果という社会的な影響を上書きしている可能性が示唆された。

本研究は、学術変革領域『当事者化人間行動科学』領域会議(2025年9月23日)で発表され、第20回日本統合失調症学会学術集会で発表予定である。

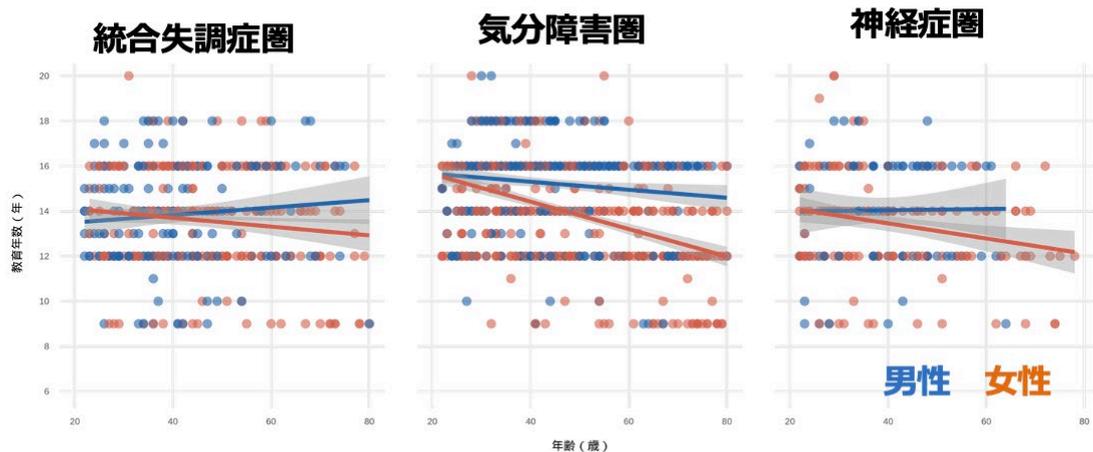


図2 精神疾患間における教育年数の年齢による差異とその特徴

考察

本研究助成では、申請課題である心的外傷体験と社会環境の変遷の影響に関する基礎的知見を複数の観点から検証した。

第一に、1920～40年代生まれの世代では家庭内トラウマが中心であったのに対し、1950年代以降、特に1980年代以降の世代ではいじめ等の水平トラウマが急増しているという知見は、ストレスの源泉が、少なくとも診療録に記載される情報では、家庭内から学校・同世代間という社会的な場へと移行している時代の特徴を反映していると考えられる。これは、今後高齢期を迎える世代の精神病理を理解する上で、その人がどの時代に幼少期・青年期を過ごし、どのような社会環境特有のストレスに曝されてきたかという世代特異的影響を考慮することが不可欠であることを示している。

第二に、ACEsの質的差異の分析は、ACEsの精神症状や社会機能への影響が均一ではないことを示した。特に、うつ病患者において養育者からの垂直ACEsが精神運動抑制という身体性を伴う中核症状と特異的に関連した、という知見は、養育者との愛着関係の困難が、基本的安全感の欠如を引き起こし、精神運動機能の基盤に長期的な影響を及ぼす可能性を示唆している。患者の病態理解において、ACEsの有無だけでなく、誰から、どのような体験であったかを質的に評価することの重要性が示された。

第三に、社会環境因子としての教育年数(EA)の分析は、年齢が高いほどEAが短いという一般的な世代効果がある状況を示した。その中でも統合失調症群では、疾患の影響が世代効果を上書きするほどEAに強く関連している可能性を示唆しており、疾患ごとに社会環境要因を検討することの重要性を示した。

本研究は、診療録情報に基づく後方視的調査であり、思い出しバイアスを含めてもACEsの情報が有用であることが指摘されているが⁽⁴⁾、情報の詳細度や均質性がカルテ記載に依存する点、横断研究デザインによる因果関係の証明の限界、大学病院の入院患者という対象者

の偏りなどの限界も有する。今後は、本助成で得られた知見を基盤とし、自然言語処理技術を活用して電子カルテの自由記述から、申請書に記載した戦時体験や家族構造の変化といった、より広範な社会文化的背景要因を抽出し、それらが高齢者の精神病理に及ぼす影響について、さらに詳細な検討を進めていく。また、収集している脳構造・機能画像とも接続することで、個体と社会とが相互作用しどのように人生行動に影響するののかの基本的な知見を得ることを目指す。

要 約

本研究は、日本の中高年・高齢者の精神病理に対する心的外傷体験と社会環境の変遷の影響を、大規模な後ろ向き観察研究で解明することを目的とした。本助成による研究では、当院の精神科入院患者データベースを用いて、特に小児期逆境体験（ACEs）と教育年数（EA）に着目した解析を行った。その結果、1) ACEsは「誰から（垂直/水平）」の体験かという質的差異によって関連する精神症状が異なり、特にうつ病では養育者からの垂直ACEsが精神運動抑制と特異的に関連した。2) ACEsの発生源は出生年代により異なり、1920-40年代生まれの世代では家庭内要因が中心だったのに対し、1950年代以降の世代、特に1980年代以降では同世代間の「水平トラウマ（いじめ等）」が急増していた。3) EAは統合失調症患者群で有意に低く、同群内ではEAが長いほど社会機能が良好である可能性が示唆された。これらの結果は、トラウマ体験の質的・時代的背景や、教育という社会環境要因が、精神疾患の臨床像や機能に深く関与することを示している。本知見は、個々の患者の生きた時代背景や社会的文脈を考慮した、より精緻な精神科医療の提供に寄与するものである。

文 献

1. Yamagishi M, et al: Retrospective chart review-based assessment scale for adverse childhood events and experiences (RC-ACEE)、PCN Rep、1: e58、2022.
2. Felitti VJ, et al: Relationship of childhood abuse and household dysfunction to many of the leading causes of death in adults. The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study.、Am J Prev Med、14: 245-258、1998.
3. Sasaki N. et al: Effects of expanded adverse childhood experiences including school bullying, childhood poverty, and natural disasters on mental health in adulthood、Sci Rep、14(1): 12015、2024.
4. Baldwin JR et al: Prospective and Retrospective Measures of Child Maltreatment and Their Association With Psychopathology: A Systematic Review and Meta-Analysis.、JAMA Psychiatry、81(8): 769-781、2024.